

寄稿

青木繁の絵画を布良の小谷家から考察する

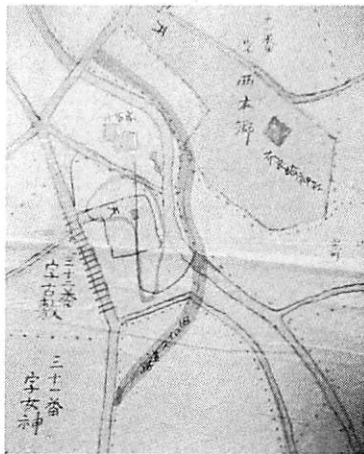
～未発表スケッチを中心に～

館山 愛沢 伸雄

①布良の小谷家と青木繁

1904年(明治37)、青木繁は小谷家に40日ほど逗留(とまり)して、布良でスケッチをはじめ60点近くの絵を描いたと後述で、恋人の福田たねが語っている。国重要文

化財である絵画『海の幸』はもちろんで、『わだつみのいるこの宮』に数あったといわれる。青木繁が小谷家に逗留していたことを示す根拠は、同年8月22日付で友人の梅野満雄宛てた書簡に、青木が「房州富崎村字布良小谷喜六方」と記した



明治15年(1874)の布良村略図

差出住所である。



現在の地形図

今日まで、青木が小谷家に逗留したという

谷家は逗留したという事実、この書簡と、同行した福田たねや坂本繁二郎、森田恒友の証言から取り上げられてきた。

小谷家周辺を描いた未発表スケッチ

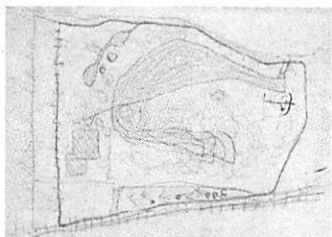
近年、梅野満雄所蔵の青木繁スケッチ帳の一部が他にわたったこと、未発表のものがあった。その1枚が小谷家と周辺の見取図と推定されるスケッチである。これを「青木略

図」と称して、限られた資料と照合しながら、描かれた背景を考察してみたい。まず現在の小谷家周辺の地形と明治期の地形とを比較検討した。1883年(明治16)に陸軍が作成した5万分の1の迅速図であり、その前年に作成した布良村絵地図で小谷家周辺の様子が簡略に描かれている。両図とも青木繁が布良に来た当時の姿と想定される。

現在の地形との大きな違いは、繰り返して起きた暴風雨や大火による住宅地や道路などの改変、関東大震災による土地隆起、漁港整備、河川の変更などである。小谷家周辺も大きく様相を変えている。

青木繁と「厳島神社」

明治期の地図での主



青木略図

な地形と比較し、「青木略図」を重ねて、構成略図を作成してみたい。絵地図であるため、現在の地形図と面積では不確かかもしれないが、「青木略図」がどこを指しているかが判明した。

薄く重ねた道路は後に設置されたバス通りである。明治期、小谷家の敷地に入るには、旧道を南から北に進み、左手に向区の共同墓地を見て、階段状になっていったと思われる急坂を下る。右にカーブした先の五差路を右折して路地を入り、クランクの先にある石塀の門を入ると小谷家である。

1874年(明治7)作成の布良村切図があり、前述した不明な神社が「厳島神社」とわかり、「青木略図」のなかで山のようにつけられた大部分は「厳島神社」の敷地とわかった。

(つづく)
(NPO法人安房文化遺産フォーラム代表)

青木繁の絵画を布良の 小谷家から考察する

寄稿
〜未発表スケッチを中心に〜

館山 愛沢 伸雄

②「青木略図」の 意図と文字の発見

明治7年絵図には布良字鯨山に「龍神社」があり、「稻荷社」の近く「御染弁天」がある。当時の2つの神社の場所とはほぼ重なるが、何らかの事情があつて現在の姿になつてなく「厳島神社」



1874年(明治7)布良小谷家周辺絵図(館山市立博物館蔵)

たのではない。かと思われ、えられ、るが、今のところ不明である。構成と「青木略図」から小谷家周辺を見ると、まず戦前、小谷家と布良崎神社の間の道路は、ス通りで、道路設置時に、「青木略図」に書かれていた山を削り、その土砂で河川の一部を埋めて、水路を変え道路にしたものと思われる。

また、小谷家の北側には深い谷間が描かれて、この谷間に川が流れ込み、その川から小谷家の敷地に水が引き入れられて池と思われ、この池がある。さて、「青木略図」には、小谷家のすぐ南側の小高い山が描かれて、そこには厳島神社があつたこと、スケッチが描かれた背景には、何らかの意図があつたと考えられる。



国民新聞「青木・安房神社より抜粋」

青木繁は、神話に造詣が深く、小谷家周辺に多く存在する神社の祭神など由緒について、小谷家当主の喜録からじっくり話を聞いたと思われる。それが「青木略図」となり、安房に根づいていた神話や伝承に引き込まれたことが、40日もの逗留となつた理由ではないかと思える。

青木繁が布良に来た目的については、後年、坂本繁二郎が「青木には、秋の白馬会展を自ざして、日本の古典からヒントを得た『海の幸』『山の幸』の二部作をものにする野心が、初めからあつたようだ」と語っている。

青木は東京美術学校に入ったころから図書館に通い、『古事記』など神話や古代の歴史・文化・伝承を学んで来たといわれる。1903年(明治36)、白馬会第8回展に出品し、学生ながら第一回白馬賞を受賞した新進気鋭の画家であつた。その青木が第9回展にどんな作品を出すかは関心がもたれていたはずである。卒業直後の写生旅行は、間近に迫つた展覧会のため、意気込みをもって布良へやつてきたのであろう。

『古事記』にある「綿津見命」「豊玉姫」「海幸彦」「山幸彦」など海に関わる神話を題材に、絵画化しようと構想していたのである。実際、青木は布良の地理や歴史を知るために、安房神社などを調査している。梅野満雄への書簡でも、「官幣大社で、天豊美命をまつた」神社と述べている。後に、青木は「豊玉姫を祭れる官幣大社」である安房神社で宝物を見たとして『国民新聞』に発表している。具体的な話を聞くために、それなりの関係者をさがし、ねらいをもちやつて来た青木に、「青木略図」を



『わたつみのいるこの宮』(石橋美術館蔵)

「青木略図」を描く重要な意図があつたと判断したい。そこで「青木略図」に描かれている内容を

丁寧に分析したところ、文字らしきものが浮かんだ。
まず漢字の「畑」が確認でき、そして青木の書簡と似た字体で「命」や「氏」と読んだ。「青木略図」では小谷家北側の谷間を2本の波線で描き、波線と文字が重なつたうえに、限り書きで判読しづらい。しかし大胆な仮説を試みるなら、上部の波線のなかには「大海祇命」「小谷氏郎」という漢字が書かれていると推察した。

(つづく)

(NPO法人安房文化遺産フォーラム代表)

寄稿

青木繁の絵画を布良の小谷家から考察する

〜未発表スケッチを中心に〜

館山 愛沢 伸雄

③「青木略図」と神話

「大海祇命（おおわだつみのみこと）」と

ことを記録していく必要があったのではない

は、青木繁が構想していた『古事記』の神話世界であった。その神話を絵画化するために「青木略図」に小

谷家や「厳島神社」の「明治十六年一月現在 安房國安房郡布良村々誌 安房郡布良村」のなかに布良崎神社の記載がある。



青木繁「小谷家周辺略図」拡大

「祭神天富命金山彦命健甕須佐之男命其境内末社ニ存スル安波神社稻荷神社浅間神社琴平神社大山祇神社住吉神社倉魂神木花咲屋姫神大物主命大山祇神ヲ合祀シテ毎年八月一日

ヨリ同三日間ヲ祭日」とあり、二元禄十六年十一月二十三日關東大地震：明治九年十一月十一日村内又大火災ニ罹リ社殿攝末社並二神庫等残ヲス焼失：明治十三年七月三日暴風俄二起リ殿宇又潰滅ニ攝末社新築ノ経書ヲナスニ至ルト云爾境外末社本村字鯨山ニアリ海祇神社祭神綿津海命ニ境外末社居村字古敷ニア

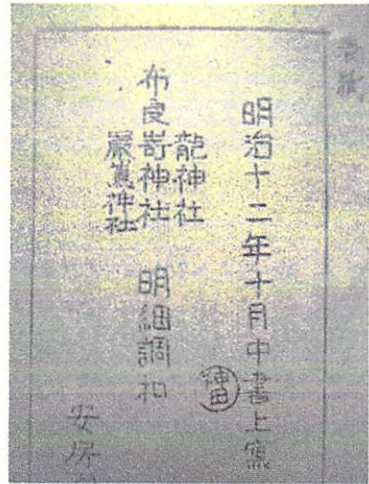
り殿嶋神社祭神市杵島姫命」とあった。つまり、1880年（明治13）、暴風によつて布良村字鯨山にあって「龍神社」は「潰滅」したが、後に再建された「海祇神社」になったと思われる。「龍神社」の祭神が「大海祇命」なので、「海祇神社」になったと思われる。この前年の文書（方版刷、富崎村古文書保存会作成）には、「布良崎神社」「龍神社」「厳島神社」と記載されている。

今回、小谷家の神棚を調査したところ、「厳島 海祇両宮神璽」との御札が見つかった。

字鯨山にあった「龍神社」は被災後に移転したと考えられるが、「厳島神社」の敷地に「龍神社」の祭神「大海祇命（綿津海命・大海澄神）」を移して「海祇（わだつみ）神社」としたのではないかと推察した。

1896年（明治29）の村公文書には、布良崎神社再建積立金をはじめ「厳島神社」「海祇神社」本殿建築料に資金を付けた旨の記載がある。布良崎神社社殿再建基金は、1899年（明治32）から8年間にわたり、全村民が懸命に貯蓄に励んで、1908年（明治41）に社殿を竣工している。

8月1日から3日までの布良崎神社祭礼において、青木は女装した漁師たちが神輿を担いで海に入る勇壮な



「布良崎・龍・厳島神社」表紙（富崎村古文書保存会）



厳島・海祇両宮御札（小谷家蔵）

「お浜出」を見たであろう。それは絵画『海の幸』下絵から明らかになっている。

一方、『わだつみの宮』の構想については、布良で海女メカネを借りて海に潜ってから、3年がかかりで制作したと、青木自身が『国民新聞』で発表している。福田たねも「青木は海をテーマにして、布良海岸の海女たちや漁師などをモデルに、スケッチなど60枚近くの絵を描いた」と証言している。

布良に祀られた祭神と、海女たちが潜水探取する姿が、具体的な構想となり、女神や海神の龍宮、山幸彦や豊玉姫の絵画が生まれたのではないのか。

(つづく)

(NPO法人安房文化遺産フォーラム代表)

寄稿

青木繁の絵画を布良の小谷家から考察する

未発表スケッチを中心に

館山 愛沢 伸雄

④小谷喜録と日箇原繁

マグロはえ縄漁で栄

えていた布良では、海難事故が絶えず、「板子一枚下は地獄」といわれ、漁労は常に死と隣り合わせであった。漁師や海女たちは、信仰や祭礼を心の拠りどころとし、日々を生き

ていた。机上で神話や古代の歴史・文化を学んできた青木繁にとって、海とともに生きる人びとの姿は、それまで抱いていたイメージとは異なる。その核となった人物小谷喜録と画家青木繁とを結んでいた可能性がある資料が見つかった。



小谷 喜録

喜録の妻マスは、村長石井嘉右衛門の娘である。過去帳によると、マスの妹タミが本郷区湯島切通坂町19番地の「日箇原繁」という人物に嫁ぎ、1925年(大正14)に46歳で亡くなっている。

日箇原繁を調べていくと、1905年(明治38)に発行された『月刊スケッチ』の発行兼編集人であり、その奥付にある住所がタミの婚姻先と同じであった。『月刊スケッチ』は、青木繁の師・黒田義文の村長石井嘉右衛

門、後に村長となる神田吉右衛門や満井武平等とともにも、水産業で重要な役割を担った。また、俳句を嗜(たしな)み著名な俳人角田竹冷などとも交流をもち、芸術・文化をよく理解する人物であった。

青木繁が小谷家に逗留した1904年(明治37)は日露戦争の開戦時である。前年に開設された帝国水難救済会布良救難所は、海上警察的な役割を担い、看守長小谷喜録は、多忙な日々であった。東京湾口部の要衝である布良には、1891年(明治24)に海軍望楼が設置され、艦船の見張りや気象観測、艦船遭難への対応、電報や電報を扱っていた。さらに布良では望楼攻撃の軍事演習もおこなっていた。

この艦隊が英国やドイツの輸送船を沈めた際には、砲撃音が布良でも聞こえたという。当時、青木らもその砲撃音を聞いたはずであるが、梅野満雄宛の書簡には何も記されていない。これは、小谷喜

録が布良救難所看守長であったことと配慮したのかもしれない。日露戦争中にあって小谷家に、40日も逗留したこ

同 年七月二十五日午後三時二十分 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀	同 年七月二十五日午後三時二十分 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀	同 年七月二十五日午後三時二十分 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀	同 年七月二十五日午後三時二十分 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀	同 年七月二十五日午後三時二十分 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀	同 年七月二十五日午後三時二十分 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀 皇太后御葬儀
--	--	--	--	--	--

『帝国水難救済会 50年史』より

右衛門や満井武平等とともにも、水産業で重要な役割を担った。また、俳句を嗜(たしな)み著名な俳人角田竹冷などとも交流をもち、芸術・文化をよく理解する人物であった。

この艦隊が英国やドイツの輸送船を沈めた際には、砲撃音が布良でも聞こえたという。当時、青木らもその砲撃音を聞いたはずであるが、梅野満雄宛の書簡には何も記されていない。これは、小谷喜

録が布良救難所看守長であったことと配慮したのかもしれない。日露戦争中にあって小谷家に、40日も逗留したこ



小谷喜録「日露戦争」布良救難所看守長表彰